

---

# 魔法少女リリカルなのはR e w r i t e

由真

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはRewrite

### 【Nコード】

N6751Z

### 【作者名】

由真

### 【あらすじ】

もはや敵なしと云われるほどの実力者、氷上京谷は高町なのとはある違法研究施設に突撃をかけようとしていた。そこで出会ったのは一人の生きる意味を知らずに人間兵器にされかけた少年。

京谷はその少年を助け、自分の仲間に取り込むことにしたのだった。  
。。。

それから二年後、時空管理局局長堂本奏のもとナイトオブブラウズ

のメンバーの一人となった一騎は壮大な戦いに巻き込まれていく!?

その剣は誰を守るために、その意志は何を変えるために。

魔法少女リリカルなのは Rewrite、始まります。

お知らせ

この作品はEエブリスタ（現在非公開）で掲載していた私同名小説の前の時間軸の話になります。また、そのサイトで掲載していた内容も後々掲載するのでご了承ください。

この作品はリリカルなのはシリーズの二次創作です。

また、一部原作とは異なる設定がありますが、あくまでこの話のことであり、原作とは一切関係ありません。

**R e w r i t e 0 : 若き剣士(前書き)**

一騎「始まったな・・・」

京谷「ああ。つか許可とって10か月くらいほっといて今更再始動  
つてのもなかなかいい加減だぞ」

作者「面目ない・・・。だって仕事もいそがしいし」

一騎「まあ、いいか。んじゃ、始まるぞ」

## R e w r i t e 0 : 若き剣士

「味方の損害率、70%突破!!」

「第五防衛ライン崩壊します!!」

「第104部隊から援軍要請が．．．!!」

「ぐう、何故だ!!なぜ我が国がこうも簡単に圧されてしまっているのだ!？」

総指揮官であろう男は非常に焦った顔をしていた。今この世界では戦争が起きている。この国と近隣の小さな国。

無論圧倒的に、今やられている側の国の方が圧倒的な軍事力を持っている。なのに何故非常に不利な状況にいるのか。

それは．．．小国側に最強の戦士達が味方にいたからだ。

「スターダスト・フレア星屑の咆哮ッ!!」

そう叫んだ俺の仲間の一人、星川さららの放った砲撃がフィールドを張っているにも関わらず、再び複数の機械魔神をいとも簡単に打ち抜く。

当たり前だ、魔法とビームじゃ組成が違う。混乱するのも無理はない。

「メテオ・インパクト隕石の衝撃ッ!!」

別の方向ではさららの双子の姉、星川きららが同じく機械魔神をぶっ壊していた。

二人ともまだ10歳なのになかなか出来るやつだ。

さて、俺も動かないと敵にロックされてんな。  
前方に六機．．．いずれも中距離戦闘用か。向こうさんは、俺を見  
つけるや否やマシンガンを撃ちながら突撃してくる。  
が、焦っているのか狙いが甘いし統率もとれていない。

ならば、隊長機を先に落としておくか。

俺は自分の刀の一本、白龍を抜いて敵の動きを注視する。そして、  
隊長機が俺の射程に入った。

「ドラゴン．．．スレイヴッ！」

俺は刀に淡い黄色の光を纏わせ、薙ぎ払う。刹那、刀から三日月状  
の剣撃が放たれ隊長機を引き裂き撃墜する。

隊長機が落とされ、残りの機体の統率がさらに悪くなる。それを読  
み取った俺は一気に距離を詰め、すり抜け様に二機の腹を引き裂く。  
そして爆発、さらに誘爆して二機を落とす。

そして残りの一機は苦し紛れにマシンガンを乱射してきた。が、そ  
んな甘い照準で俺が当たるわけではない。

反転した俺はそのまま、コックピットに刀を突き刺す。  
誘爆状態に入ってからすぐに抜いて、上空へ避難した。その直後、  
それが爆発した。

俺が一息突いた後、シオンから通信が入る。

「シオンさんか」

『どうやら最終兵器が出たようです。反応の情報を転送します』

そして程無くそのデータが送られてくる。ふむ、オールレンジ攻撃  
とマルチロック攻撃が出来る高機動の機体か。  
成る程、すこしは骨がありそうだ。

「じゃあシオンさん、要塞破壊の攻撃お願いしていいですか」  
『わかりました。では、五分で片付けてくださいね』

「まったく、シオンもしれつとすごい要求をしやがる。何て言っている間に敵は俺目掛けて突っ込み、俺をビームソードで斬りつけようとする。」

俺はそれを刀で裁き、難なく切り刻んだ。  
すると、遙か後方から高火力のビーム砲が飛んでくる。  
虚を突かれたがなんとか回避し、飛んできた方角を見た。

そこには、蒼い翼を讃えた神々しい機械魔神がいた。  
それは他とは圧倒的に違う速さで迫ってくる。

「ちっ」

俺は、刀を構え直し敵の攻撃に構える。敵は二刀流のビームソードを抜き薙ぎ払うように突撃してくる。

その脇をなんとかすり抜けて、反転する。

射撃は得意じゃねえが仕方がねえ。

俺は、刀を握ってない手に魔力を込めて無言詠唱する。

そして振り返った刹那に誘導射撃魔法”アルテミス”を放った。  
魔方陣の周囲に幾多の光の珠が浮かび、すぐに敵目掛けて光が駆ける。

そしてすぐに、突きの構えをして突貫。  
アルテミスが直撃した直後に、白龍が敵を捉える。確実に落とした  
と思ったが違った。

爆発の煙が晴れたとき、敵はしっかりとシールド防御をしていた。そしてシールドを左に振り払い、レールガンに至近距離で発射するが、遅い。俺は振り飛ばされる力を利用して後ろに回り込んでいた。そして、左の翼を斬り落とし爆発。敵はバランスを崩した。

あと2分か・・・

残り時間を確認して、敵の正面から斬り結ぶことを選び、旋回しながら迫る。相手も律儀にそれに合わせてきた。

俺はあらかじめ左手に光波シールドを精製しておいた。なぜか？直ぐに解るさ。

そして真っ正面から斬り結ぶ。俺の刀は相手のシールドを捉え、相手のビームソードは俺のシールドを捉えた。

さすが最強の機械魔神。出力が違うな。だけど・・・終わりだ。

俺は左手に一瞬だけ力を込め、ビームソードを押し退ける。そして直ぐ様もうひとつの刀、”黒龍”を逆手で抜きそのまま右腕を斬り落としした。

あとは簡単、黒龍を手で回して正しく持ち返し刃で右脚、白龍で左脚、そしてクロスで両腕を斬り落としした。

ついでなので、アルテミスで羽と頭を頂く。

バランスを失った相手は為す術なく地上へ落下していった。

そして、一息ついて辺りを見回すときさらさらがほぼ制圧していた。ある意味なのはたちよりタチが悪いな・・・。

「シオンさん、終わりました」

『解りました。では、全員を下げてください』

「了解。全員に告ぐ！！直ぐに撤退だ！！」

俺は、前線に向かっていている連中に下がるように告げて、自身も安全圏へ下がった。

そして、シオンが自身のインテリジェントデバイス”アイシクルエツジ”を構え、魔法の詠唱を始める。

「極地に集いし白銀の光．．．消せぬ輝きを纏い、闇を払う剣となれ．．．ダイヤモンドブリザードッ！！」

唱えた瞬間、射線軸に七つの魔方陣が浮かぶ。そして翳された手から、青白い砲撃が放たれた。

青白い光が魔方陣を通過する度に速く、強力になる。最後の魔法陣を通過した時、放たれた時の大きさより何倍も大きい光となって、要塞へ向かって走っていった。

フリーダム  
「自由”、反応ロスト！！」

「敵、全軍撤退していきます！！」

「なに！？なにをするつもりだ．．．」

総指揮官はまさかの事態に焦りの顔しか浮かべられない。そして、何気なく前線に顔を向けるところからへ飛んでくる一条の光を発見した。

「な．．．！！」

「う．．．うわああ！！」

「に、逃げろ！！」

本能的に死を予感した兵士たちは我先にと逃げ出し始める。しかし、その頃には到達し要塞を巨大な冰山へと変貌させていた。

俺とシオン、きらら&amp;さららがレジスタンスたちのキャン  
プに降り立つと、戦線に出ていた人達たちが歓喜の声で迎えてくれ  
た。

「ありがとうございます!」

「すげえな兄ちゃんら!」

「助かりました...!!」

各々から感謝の言葉を述べられる。中には感極まって泣き出す人も  
いた。きらら&amp;さららの幼女コンビはおっさんたちに肩車  
されたり手荒く頭を撫でられたりされ、喜ぶ一方で笑顔を浮かべて  
る。

「いえ、俺達は少しだけ力添えしただけですよ」

俺はというと、レジスタンスの代表に謙遜の言葉を返していた。  
そりゃ当たり前だろう、社交辞令だ。まあ...俺がそういう人間  
だからだろうからな。

ふむ、シオンが疑いの目を向けていることはスルーしよう。

「一騎、そろそろ帰還せねば...」

「ん、そうか...さらら、きらら!」

「はいっ」

「うんっ」

シオンに催促されて、俺はきらら&amp;さららを呼ぶ。四人が  
近くに集まったのを確認してシオンが転送ゲートを開いた。

魔力の突風が俺達を包み、俺達が元々いた世界に引きずり込むよう

にまとわりつく。

その異様な光景に、みんなは呆然としていたが、やがて一人が駆け寄りながら叫んだ。

「教えてください！！あなたたちは何者なんですか！？」

まあ気持ちは分かるよ。だから、教えた。

「俺達は……」ナイトオブドラゴンズ「円卓の騎士」さ」

**R e w r i t e o : 若き剣士（後書き）**

京谷「すくねえなオイ。やる気あんのか」

一騎「いやプロローグだし」

京谷「書いた当時作品知らなくていきなり原作崩壊してたな」

一騎「それはまあ・・・しかたない。こんなでも読んでくれた人は出演依頼すごかったしな」

京谷「全員は？」

一騎「さすがに無理らしい」

京谷「一人で20人くらいよこしてたしな。っと、そろそろ」

一騎「こんな小説を読んでくれた方には大感謝を。それだはまた次回」

## R e w r i t e 1 : k n i g h t o f r o u n d

そうして俺達は管理局のある世界の自分たちの部隊、ナイトオブ  
ウンズの隊舎に帰還した。

思ったよりも早く済んで助かったところだ。

「おかえり一騎、シオン、きらら、さらら」

「おかえりです」

「はい、ただいま戻りました」

「貴方もだ、京谷さん」

「ただいま、京谷さん、フィオネ」

「ただいまです」

管理局局長直轄特務部隊、”ナイトオブブラウズ”隊長、氷上京谷<sup>ひかみぎょうせ</sup>  
さんとユニゾンデバイスであるフィオネに出迎えられ、四者四様の  
挨拶を返す。

京谷さんもバリアジャケットモードのままである辺り、また訓練や  
らなんやらしてたのだろう。フィオネも大きくなつたままだ。

さて、この京谷さん<sup>ザ・クリエイト</sup>宝具生成、異能再現という反則的レアスキルを  
所持している。そして己の魔力もEXというとてもない量を保有  
しているため管理局で倒せるやつは居ないんじゃないかというくら  
い強い。本気を出せば本人曰く、”星の五つや六つ簡単に消せる”  
らしい。

誰かこいつを倒せるってやつは前へ出るんだ。

こつちのオレンジ頭の人はフィオネ。京谷さんのユニゾンデバイス  
なんだが、単騎でなのはと張り合っていたことがあった。あのリン  
カーコアがあつてこの融合騎ありといった感じだな。

「まだみんなは帰ってねえよ。ゆっくりロビーで休んでな。時間まではまだあるからさ」

「「「「はいつ」「」「」」」」

京谷さんの指示を聞いた俺達はとりあえず隊舎のロビーに向かう。隊舎は京谷さんの趣味なのか、妙にアットホームな感じがする。

「では私は支度してきますね」

と、シオンはそういい残して自室に帰った。

じゃあ俺はなんか飲むもの飲むかな。

「なんか飲むか、さららにさらら」

「あたしジンジャーエール」

「私は．．．イチゴラテで．．．」

準備の早いやつだ、と俺はちっこい姉妹を見ながら思う。とりあえず、頼まれた飲み物を買ってやった。飲み物を受け取った二人は嬉しそうに飲んでいた。その辺りは普通の少女だなと俺は思う。そんなじよそこらの小学校ならモテるのだろうが、まあ．．．戦ってるときの表情は見せたくないな。特にさらら。

「あ、一騎さんなんか失礼なこと考えたでしょ」

「気のせいさ」

ちっ、さすがさらら。近接戦闘を生業とするやつは違うな。

まあそんなことはさておき、俺はアーモンドチョコ珈琲を買って一口啜る。うむ、いつもながら上手い。ささやかなチョコの旨味がコーヒーとマッチして最高の味を引き出している。

「一騎さんっていつもその「コーヒー」飲んでますよね？」

ふと目を俺の手に向けたさらさらが質問してくる。

「ああ、はじめて飲んだときうまくてな」

「そうなんですか・・・」

「なんだかんだで適当なんだね、一騎さん」

「うっせ」

そんな他愛のない会話をしながら、談笑する。

すると、二階から誰かが降りてくるのが捉えられた。

「ありゃ、一騎くんたち帰ってたんだ」

「ああ、ただいま命」

「おかえり きららとさららもね」

「ただいまっ」

「ただいまです」

降りてきたのは同じくナイツオブ라운ズのメンバー、つきしろみこと月城命だ。

槍型のデバイス”オベリスク”を駆る近代ベルカ式で、陸戦AA+の桜塵おつじんの騎士である。槍を扱わせれば一級品で、”竜騎士”の異名で呼ばれる事もあった。

「今日のはあんまし怪我ないね？一騎くんも成長したか」

そう言ってくすくす笑う命。一応命の方がひとつ年上だが何故か年上な雰囲気を持ち合わせていない。スタイルは大人なのだが・・・。

「そっぴやさ、午後から何があるかは知ってるよね？」

「ああ、アースラに隊長と俺と優希、希来が派遣されるアレだろ？」

「いったいなにが・・・」

「そうですね。アースラにはフェイトさんやなのはさんが居ますし、なによりクロノさんとかも・・・」

さらにも同じことを考えたようで、はたと首をかしげたがそれは空中で霧散した。気づけば時間だったようで、京谷さんが羽田希来と俺の妹、桜井優希を連れてやってきたからだ。

羽田希来は俺の親友で、ナイツオブラウンスメンバーでもある。自律兵装も組み込まれた機械式の剣”アロндаイト”を駆る近代ベルカ式の陸戦A Aの魔導師だ。俺が知ってる近代ベルカ式の魔導師の中ではかなり射撃が上手い。

変わって優希は俺と同じ数少ない双剣の使い手で、”ルナティック”と”サンライズ”を扱う。ちなみにデバイスなのはルナティックの方だ。近接型にも関わらずミッドチルタ式で、空戦A Aの魔導師だ。なぜミッドチルタ式なのかは、使用する魔法の大半が、射撃や治癒防御魔法で占めているからだ。つまりところ優希は俗に言う魔法戦士なのだ。まあ・・・俺が言えた義理じゃないのだが。

「まだ休憩中だったか？」

と、京谷さん。

「いえ、行くならもう飲み干しますよ」

そう言って、俺はコーヒーを飲み干す。きららとさららはすでに飲み干していた。

「ん、準備できたか？」

「はい。きららとさららはもう少し休憩な。んで終わったらデスクワーク」

「「はいっ」」

俺が指示を飛ばすと二人は元気よく駆けていった。10歳らしく元気なものである。

「そいじゃ行くぞ、一騎、優希、希来」

「「「はいっ」」」

先頭に行く京谷さんに付いていく俺達。そして程無く転送ゲートについた。

「目え閉じてろよ」

そういつて京谷さんは慣れた手つきで詠唱とゲート起動を行い、一瞬にして俺たちは異空間へ飛ばされた。

そして気がつくとあら不思議。俺達は管理局巡航艦”アースラのブリッジにいた。

「あら、もう来たんだなナイツオブラウンスの諸君」

一番最初に声をかけてきたのは、アースラ艦長であるクロノ・ハラオウンだった。隣には言わずと知れたアースオブエース、高町なのはと希代のエースストライカー、フェイト・T・ハラオウンもいた。

「はじめまして、高町なのは二等空尉です」

「はじめまして、フェイト・T・ハラオウン執務官です・・・」

なのはは元気よく、フェイトは真面目に挨拶してきた。もちろんこちらも挨拶をする。

「管理局局長直轄特務部隊ナイツオブラウンス隊長、氷上京谷二等空佐だ。で、こっちが」

「京谷のユニゾンデバイス、フィオネです」

「桜井一騎さくらいかずき二等空尉です」

「桜井優希曹長です」

「羽田希来軍曹です」

「ああ、よろしく四人とも」

挨拶にクロノさんが労いの言葉をかけた。そして、京谷さんが口を開く。

「久しぶり。元気そうで何よりだな、クロノ？」

「ああ、闇の書事件以来か。空佐もご健勝で・・・」

「っと待った。別に階級で呼ばなくていいだろ」

「だけど・・・」

「俺がいいつつうんだからいい。むしろ命令」

「は、はあ・・・」

妙なところでわがままを使う人である。

「じゃあ京谷、再会を喜ぶのはこれほどにして・・・」

「ああ、そうだな。じゃあお前ら、ブリーフィングルームに行くぞ」

「」「」「」「はいつ」「」「」

俺達はそうしてブリーフィングルームに向かう。

「ねえ」

なのはが優希に話しかける。

「あ、はい。なんででしょうか．．．？」

「優希ちゃんは訓練とか好きなの？」

「はあ．．．お兄ちゃんにたくさん鍛えられましたからそれなりに  
は．．．」

「じゃあさ、私と模擬戦しないかな？」

「ええ!？」

「いいじゃん、優希ちゃんみたいなタイプは初めてだから」

「あう．．．どうしよ、お兄ちゃん．．．」

なのはの熱意に折れそうな優希が俺に救いの手を求める。が、

「頼んだぞ、なのは」

「やたあ!!!」「お兄ちゃん!!」

なのはの喜色満面な声と優希の悲観的な声が重なる。残念だが、優希はなのはに教導してもらおうとしよう。そして、俺は誰かの視線に気づく。振り返ると、そこにはフェイトがいた。

俺がぺこりと頭を下げると、フェイトもぺこりと頭を下げた。  
んー、いい子だなフェイト。

「あの．．．」

「なに？」

「えと．．．その．．．一騎さんは、おいくつですか？」

「俺か？俺は13だよ。ちなみに優希が11、希来は12な」

「同年なんですね」

まあそういうことになるか。

「えと．．．術式は？」

「近代ベルカだよ。デバイスは．．．アルル!」

俺がその名を呼ぶと、俺の胸の前の空間が湾曲し、そこから俺のユニゾンデバイス、アルテマウエポン<sup>II</sup>ドゥーエが現れる。  
山吹色の髪で片目を髪で隠している。別に何かあるわけじゃない。体はけっこうグラマーだ。

一応女の子のためアルテマウエポンと呼ぶのはあまりに可哀想だと思っ  
て、愛称を込めてアルルと呼んでいる。

あ？なんで俺もユニゾンデバイスがいるかって？それはあれだ、  
この京谷<sup>おほか</sup>さんの気まぐれだ。まあいいんだけどな。

「どつたの・・・？」

アルルは寝起きだったようで寝巻き姿のままだった。別に俺の中にいる必要はないが、アルル曰く俺の中は心地よいらしい。

「はやてとおなじなんですネ、一騎さんのデバイス」

「ああ、はやてはリインフォースだったか」

「私はリインちゃんみたいに優秀じゃないんだけどね・・・」

とか言っているが、アルルはリインとは別方向で激しく優秀だ。主に能力強化や防御、回復で進化を發揮する。アルテマウエポンという名前を貰ってるくせにそれもどうかと思うけど。

「じゃあ武器はどうなんですネ？京谷さんと同じ？」

「いやいや・・・んなわけあるかよ・・・。俺のはこれだよ」

そう言っ  
て、俺は愛用の二振りの刀を取り出す。

「うわぁ・・・」

俺の刀を見て、フェイトは感嘆の声をあげる。俺から白龍を受け取

り、フェイトは一息で抜いた。頭上でくるくると回して刃紋を見てからまた閉まって俺に返す。

「業物なんですね．．．私、刀の事はよく分らないんですが、すごく強そうな感じがします」

「いや、今フェイトが抜いたのはそうでもねえよ」

「え？」

まあ驚くわな。そこへアルルが口を挟む。

「一騎の白龍は不殺の刀っていう異名があるんです。その刀は人を傷つけることが出来ないんですね」

「ええ！？」

「正確には、”斬った斬り傷がすぐに治る”んだ。まあその代わりに痛みは普通に斬ったときより遥かに痛いんだけどね」

「へえー．．．」

フェイトは関心を持って、アルルの話を聞いていた。そうして程なくブリーフィングルームに到着する。

そして戸を開けると、すでに京谷さんとクロノさん、希来、なのは、優希に八神はやてが座っていた。

「あ、はやて」

「フェイトちゃんもきとったんやな。そっちのかつちよええ子とちつこいのは？」

「桜井一騎だ。こっちはアルル」

「よろしくです、はやてさん」

「私は八神はやてや。こっちは．．．」

「ラインフォース？です アルルちゃんからはなんか似た者同士な気がするです」

「うん、私もリインと同じユニゾンデバイスだよ」  
「そうなんですかー」

なんかリインとアルルの間に既に固い友情が結ばれたようだ。

「お、来たか。とりあえず座れ」

京谷さんの指示に従い、俺達は各々座る。俺の右にはフェイト、その隣には希来、左にははやてといった具合だ。

「よし、ではブリーフィングを始める。まずはこれを見てくれ」

進行役をするらしいクロノさんは、そう言つとモニターに廃墟に立つ謎の生物の画像が投影された。

「これは・・・?」

と、なのは。

「これは二週間前に第2武装隊が送ってきた最後の映像だな」

「第2つて謎の反応を調査しに行ったところですよね?もしかして第2武装隊つて・・・」

「全滅した可能性が高いな・・・」

優希の疑問に俺が答える。

「せやけど第2ちうたらなんか特化した戦闘のプロが所属するとこやろ?そんな所が何でそう簡単に全滅するんやろか」

「考えられるとするなら古代遺産が絡んでる可能性は高いよね」

「いや、もうひとつあるぞフェイト」

「え？」

フエイトの分析に京谷さんが横槍を入れた。それに対しクロノさんが確かにというふうに頷いた。

「ああ、京谷が三ヶ月前に倒してきたスティルヴのパターンもある」  
俺はそれを聞いてそういうこともあったな、と思った。あの時、京谷さんがふらりと出掛けたときに打ち倒した魔物である。

「つまり、明確な意思を持った魔物が闊歩している可能性がある。管理局は危険対象として発見しだい駆逐、という方向で決定している」

「じゃあ俺達はその対策とごみ掃除を請け負えばいいのか？クロノ」  
「そういうことだ。だが、データが少なすぎる。後にも先にも現状はこれだけ。ユーノ使って無限書庫ググらせたり管理世界に片っ端からアクセスさせているんだが・・・」

喋るクロノさんの表情を見る限りあまり芳しくないようだ。しかし然り気無くネット用語が言葉に混ざっている辺り流行については行っているようだ。

「だから最近ユーノくん見かけなかったのかあ・・・」

なのはが寂しそうに呟く。ふたりは親友らしいから、話したり一緒にご飯が食べられなくて寂しそうな思いをしているのだろう。そこに京谷さん宛に通信が入る。

「どうした」

『第47管理世界”ガイア”に例の件に関して情報がありました』

「それで？」

『はい、データの魔物がその世界に来ていたようですがなにやらみおん．．．』と呟いていたそうです』

「『『『『『みおん．．．？』『』『』『』』」

その場に居合わせた全員が首を傾げた。

「それだけか？」

『ええ、申し訳ありません．．．』

「いいさ、関与したてはそんなもんだろ」

『そうですね．．．では、失礼します』

そうして局員の通信は途絶えた。

「さて、一応ガイアに向かった方がいいか？」

「そうしてくれ、実際に向かつて分かることもある」

「うし、じゃあ今回は俺、一騎、なのは、紫苑で出向こう」

「了解した、出向許可を出す」

どうやら具体的な方向性は決まったようだ。そして京谷さんはすぐさま神月紫苑さんを通信で呼び出した。

『なんじゃ京谷』

「紫苑、今大丈夫か？」

『うむ、出向も終えてつい先程までオンライン麻雀に興じておつての』

「そうか、なら今から出撃準備してガイアの管理局基地に向かつてくれ」

『了解じゃ。しかし、急に出撃指令などまた穏やかな話ではないの．．．』

「まあ穏やかな話じゃないな．．．」

『ふむ、ならば10分有れば指定ポイントに行っておこう』  
「ああ、助かる」

そうして、京谷さんは通信を切った。

「よし、じゃあバリアジャケットに変えて出撃するぞ」

「了解!!」

「アルル!」「レイジングハート!」「フィオネ!」

「はいっ!」「Yes, My master」「おっけー!!」

京谷さんと俺、なのはの呼び掛けに応じてフィオネらが応える。そして体は光に包まれ制服がバリアジャケットに変貌していく。

俺のバリアジャケットは黒が基調で、制服を黒くしたような感じにも見える。そして、腰には二本の刀が添えられ白のマントが左腕に巻かれている。

京谷さんの俺と似ているが、こちらは黒コートである。

「ふええ．．．二人ともかっこいいね．．．」

なのはが驚いたような顔で、こちらを見ながら言った。確かに俺と京谷さんが並べば天使と悪魔に例えられることもしばしばである。

「まあ俺はかっこいいからな」

「自分で言うか、京谷さん．．．」

京谷さんは分かっているという振る舞いをするのがしばしばある。まあ言動に行動がついていくのだから俺は文句言わないけれど。今思えば同じ年なんだよなあ．．．。

「どっした、一騎」

「いえ、なんでもないですよ」  
「そうか、んじゃ行くか」

そう言つて俺達は再びブリッジに向かう。俺と京谷さんがならんで歩いている姿は輝かしく映つたのだから、すれ違う人ほぼ全員が敬礼で迎えてくれた。京谷さんは管理局では異常なまでの魔力と多彩な戦術に敬意を表して、”神帝”と謳われている。ちなみに俺は武器である二本の龍の名前がついた刀から”双龍”と呼ばれているらしい。

「人気者だね、二人とも」

なのはは笑顔で俺と京谷さんに話しかける。

「まあ・・・なあ・・・」

「人気者は困るぜ」

あはは、京谷くん自分で言つたら意味ないよ？」

「たまにはいいじゃないか、なあ？」

「いやいや、俺に振られても困るから」

「一騎は澄ましてやがるな。草食か、んん？」

あ、ちよつと暴走してやがるな。

そんなこんなで、談笑しつつブリッジに着いた。それから例の視界暗転による転送で第47世界ガイアの管理局基地”ユーノラス”についた。俺達が基地の広場に降り立つと、二人の士官が出迎えてくれた。

「お疲れさまです。本局管理補佐官、ニーチエ・ゲインズです」

「アルニカ・フォレスト通信士です！お茶の用意してますから、休

憩室にどうぞ」

「構わないよ、アルニカ。俺達がこんなことでへばると思うか？」

「ま、まあそうなんだけど・・・」

アルニカは困ったような顔で答える。それを不思議に思ったか京谷さんが口を挟む。

「知り合いか？」

「ああ、初めての単独で助けた子だよ」

アルニカは俺が初めて単独で担当した任務の際に助けた子である。震災の処理だったのだが、彼女は身寄りがなかったために俺は管理局で勤めることを勧めた。まあアルニカ自身に適正があったのもあるがな。

「お、じゃあなかなかイイ感じな・・・」

「んなわけあるか」

「・・・」

「ほらあ、一騎くんが否定するからアルニカちゃん沈んでるよ？」

なぜ沈むし。

「ここか？」

「はい、対象は北西の雪が多い大陸の南に渦潮に囲まれた島があるのですが、そこに局員が調査に行っていた折りに発見したそうです」

会議室のモニターにガイアの地図を投影しながら、俺達は例の敵の居場所を聞いていた。

「渦潮に囲まれた島かあ．．．不思議な場所だね」

「まあ渦潮に捕まったら大概は壊れるしな」

「つーことは、水の敵が出てきそうだな．．．」

「そうなりますね。ここは不思議に包まれた世界ですから。まだ分からないことはたくさんありますよ」

そう言つて、ニーチェは剣をひとつ取り出す。

「つてこれは？」

「この世界のエクスカリバーです」

「これがか!？」

「京谷くんのエクスカリバーとは違った形だね？」

「そりゃ、世界毎に同じ名前のはある。違う世界では同じ姿形したやつが俺達とは違う生活を送っているのだから。ちなみにこの世界には”真のエクスカリバー”があつたら、古代遺産の」

「はい、ですがどこにあるかは未だにさっぱりですね．．．つて話が逸れます」

「それがうちのクオリティだ。とりあえず向かえばいいのか？」

「はい、お願いします」

というわけで、早々と準備した俺たちはその場所に向かつて通常飛行で向かつていた。

『皆さんの速度なら10分で着きますね。後は定時連絡と帰還時のコールがあればこちらからは特に指示はしません。氷上空佐の指揮にお任せします』

「了解だ」

アルニカからの通信で任務確認をする。通信が途絶えた後最初に口

を開いたのは紫苑さんだった。

「そう言えば、今日で京谷が隊長になって三ヶ月じゃの。指揮には慣れたかの？」

「んー．．．ぼちぼちだな。それにうちの連中は優秀だから簡単な指示で思った以上の事をやってくれる」

「そうじゃの。シオンやアリスに掛ければ分隊指揮はお手のものじやろうから」

「ついでに言えば私と京谷くんが会ってもうすぐ4年なんだよね。

一騎くんとは2年かな？」

「そうだな．．．案外早いもんだ。皆階級が上がればもっと忙しくなるんだろうな」

「だな。俺は16になりや提督試験の権利得られるし、紫苑はもうすぐ一佐の試験がある」

「みんな目標あるもんねえ．．．」

なのはは遠い目を向けながら呟く。なのははまだ中学生だからそこまでのだろつが、ガチガチの局員な俺は十分に忙しい。そのうちなのはらがそうした時間を送り出すようになるのは嬉しいのやら悲しいのやら。

ちなみに俺がフェイト・はやてと面識がなかったのは二人とも俺とは別方面な仕事だからである。なのはからは会ってみるかと何度も言われたがまったく時間調整が出来なかった。しばらくすると、前方に渦巻き島が見えてきた。

「あ、あれじゃない？」

「．．．なんかいる？」

俺のマントにくるまっていたアルルが呟く。目を凝らしてみると、飛竜っぽいのが何匹もいた。そのうちの二匹がこちらに気づいたら

しく、こちらに向かってきている。

「確実に敵意を剥いておるの」

「だな。戦闘開始するぞ．．．一騎と紫苑は遊撃！！なのはは後方支援だ！！」

「了解じゃ！！京谷は指揮を！！」

「分かった！！」

そしてそれぞれ散開する。俺は一旦上空に上がった後、アルルと意思疎通を完了させた。

「いくぞ」

「ユニゾン・イン！！」

アルルが俺と同調し、ユニゾンインを完成させる。この間俺の髪の色が薄くなり、瞳の色も薄くなる。

そして銀竜の射程圏に入ったらしく、銀竜はブレスを吐いてくる。

それにいち早く反応した紫苑さんは、オリジナルのバリア系防御魔法”チェーンウォール”で防いだ。それに呼応して、なのはがデイベインバスターを撃ち込み、撃墜する。

俺はというと、銀竜の一匹が殺られたのを見た仲間が怒ってこちらに来たのを迎撃するために突撃していた。

『中継です！銀竜には特殊防御を備えているのを確認しました。気をつけて！！』

と言う声と俺の”ドラゴンスレイヴ”の攻撃が重なった。光牙は銀竜に向かって一直線に向かう。が、銀竜に張られたバリアに入った瞬間、攻撃が屈折した。

「!？」

「攻撃が．．．曲がった？」

『（ジャマーフィールドに近い反応を検知しました）』

「む．．．様子見てワンシヨット」

『（ストライクチェーン）』

紫苑さんが攻撃を仕掛ける。魔力で形成した鎖が銀竜にまとわりつくが、腐りはねじ曲がりやがて砕けた。

「京谷、分かるか？」

「ありゃあ、ディストーションフィールドだな。射撃はまず届かねえ」

「なるほどね。じゃあ、京谷くんも前線に出ようか」

「ああ」

そう言つて京谷さんはゲイボルクを呼び出す。それに呼応するよう  
に、俺達は近接攻撃のスタンバイに入った。

「ACSDライバー、起動」

「ストックブレイク、スタンバイ」

「スネイクエッジ、スタンバイ」

刹那、全員が目標に向かって突進した。俺は固まっている箇所に、  
三人は一体ずつに。

ゼロ距離において、ディストーションフィールドが通用するはずが  
ない。なのはのエクセリオンバスター、俺のストックブレイク、紫  
苑さんのスネイクエッジ、京谷さんの竜剣でまとめて葬った。

「すごいね．．．みんな。一瞬で全滅なんて」

「なんだかねだでなのはも落としているじゃないか」

「だけど、一騎くんや紫苑さんは複数倒したし・・・」

なのははそう言って俯く。俺のストックブレイクは範囲攻撃で、攻撃対象と半径数メートル内にいる同じ攻撃対象の敵に物理攻撃ダメージを与えることが出来る優れものの技だ。言うなれば雑魚殲滅用の技である。紫苑さんのスネイクエッジも似たようなものである。京谷さんがちよつと不機嫌なのは撃墜数で負けたからだろうな。そこに再び通信が入る。

『聞こえつか京谷』

「その声、カルトか？」

『ああ、任務中に例のやつとおぼしき奴が攻撃してきた』

「なんだと!？」

『まあ一捻りにしてやったが・・・これ、簡単に終わるようなもんじゃねえぞ』

命と同じ槍使い、”ロンギヌス”を駆る空戦S+の荒くれ者カルト・ヴェステンバーグさんはそう呟いた。

そう・・・俺達はこれから先に起こる事の重大さに、まだ気づかなかった。

R e w r i t e 2 : 同窓会任務に・・・なったらいいよな。(前書き)

命「投稿早いね!？」

作者「まあ・・・ねえ。とりあえず第二話」

R e w r i t e 2 : 同窓会任務に・・・なったらいいよな。

- v i e u c u l t -

「ちっ・・・派手にやってくれてるな」

俺は前方に広がる廃墟を見て嘆息した。ここはガイアで”霧の大陸”と呼ばれる大陸の南ゲートつつう空の関所にいた。

リンドブルム側に俺達やいるんだが、ゲートが盛大に破壊されていやがる。ここにいた連中はあらかじめ避難していたのがせめてもの救いか。

「・・・酷いですね」

隣にいたスノウ・ルウベル力が呟く。こいつは日本刀を駆るS+のベルカ式の魔術師だ・・・ってなんで俺が説明せにやなんのだ。

「まったくだね・・・。けどいない分、目撃情報がないのよね」

はあ、とセレナ・チェリカールはため息をつく。まあこいつはミッドだ、うん。俺と同じ槍を使う。

「話を総合すると、飛空艇を通すためにゲートを開けた瞬間謎の攻撃があつて・・・それでなんかでかい爆発があつたってこつたな、ガキンチョ」

『は、はあ・・・そんな感じですよ。なんか怖いですが・・・(ボソッ』

「う、おおい!!怖いつてなんだゴルア!?!」

『ひ、ひいい!!』

「カルト、新人泣かしはだめですよ」

「これだから若い子がついてこないんだよ」  
「やかましあ!!!」

スノウとセレナに宥められたので仕方なく退いてやった。

- v i e u k a z u k i -  
「ん．．．これは？」

通信が終わった直後、俺はひらひらと舞う羽根を見つける。それを  
手にとると非常に艶やかな触り心地がした。

「ん、どうしたの．．．ってこれは？」

「どれどれ．．．む、これは銀竜の羽根じゃの。普段は倒せば砕け  
て消滅するのじゃが、残るのは稀だな。ぬしは幸運だの」

「そうなんですか？」

「うむ、まあなにかに使えるかもしれんから大事にとっておくとよ  
かるっ」

紫苑さんにそう言われたので、俺は懐に銀竜の羽根を仕舞った。

「うし、じゃあ帰るか」

京谷さんの一言で、俺達は帰還体勢に入る。その帰り道、なのはは  
京谷さんに質問した。

「ねえ京谷くん、ディストーションフィールドについて詳しく教え  
てくれないかな？」

「ディストーションフィールドか？それはフィールド防御のひとつ

でな、周囲に鏡みたいなのを展開して攻撃の屈折を行うんだ」

「魔力による攻撃も光が含まれておるから曲がってしまっくんじゃな」  
「そうだ。威力が高いものはある程度は押し込めるが、かなり弱められるし敵の魔力が高いと大したダメージにならない。そこが怖いところだわな」

「でも至近距離ならあまり曲がった感じはしなかったんだけど．．．

」  
「まあな。ディストーションフィールドは周囲に展開、さらに表面しか効力がないから範囲の中では効果がない。だから、ゼロ距離の攻撃にはめっっぽう弱いんだ」

「なるほど．．．」

なのはは関心深そうに頷いた。そこに俺は紫苑さんに話を振ってみる。

「まあ射撃型には辛いもんがありますよね、紫苑さん」

「そうじゃの。特になのはやはやてみたいながチガチの砲撃型には天敵に近いじゃろ」

「そうですね．．．」

「ま、いい機会だから対策練ったらいいじゃろ」

「はいっ」

そんなこんなで時間が過ぎていった。

- v i e u c u l t -

「そういえばカルト、一緒に任務は久しぶりですね？」

「ああ、そうだな。この三人は久しぶりか」

突然のスノウの言葉にそういえば、という風に俺は頷いた。

「ま、隊長が気を使って二人きりになるように調整してるしね」  
「・・・後で小突いとくか」

要らん気を回すやつにお仕置きすることを誓いながら、あたりをまた見回す。南ゲートが大破している以外は、緑が広がるよい所だと俺は思う。どうやら、南ゲート平原に美味しい湧き水があるらしいから、帰りに飲むのもいいだろうな。そんなことを考えながら横を見ると、セレナが考え事をしていた。

「どうした、セレナ」

「ふえ！？あ、いや・・・」

突然声を掛けられて、素っ頓狂な声をあげるセレナ。

「それより・・・良いとこだね」

「ああ・・・」

俺が思っていたことなので、おとなしく頷いとく。

「せっかいですから、少し歩いて回りますか？」

と、スノウ。

「うし、じゃあ下に降りるぞ」

「了解っ」

そう言って、俺達は飛行魔法を使って、平原の南ゲートに降り立つ

た。

「へえ．．．緑が凄いな」

「気持ち良い場所ですね」

二者二様の感想を耳にしながら、俺は湧水の方を見た。すると、なぜかポットとコーヒーセットが置き去りとなっていた。

「ってなんでこんなもんが落ちてんだよ」

「どつたのー」

俺の突っ込みにもセレナが反応する。そして俺の背中からひょっこり顔を出して問題のブツを見て、

「ってなんでこんなもんが落ちてんのさ」

同じ突っ込みを入れた。ちょっと面白くなった俺はスノウを手招きして呼ぶ。

「どうしました、カルト？」

スノウが来たので俺は一步引いてスノウにコーヒーセットが見えるようにした。スノウはそれを見て、

「たかがこんな．．．。．．。ってなんでこのようなものが落ちているのでしょうか」

スノウの優しさに全俺が泣いてしまった。

まあそんな事を言っているとしてもしょうがないので、二人を適当に休ませつつ俺はコーヒーを淹れていた。銘柄はモツカ。俺は甘ったるくて嫌いだ、二人が美味しそうに飲んでいるのを見て満更でもないなと思った。

「カルトは飲まないんですか？」

淹れるだけ淹れて飲んでいない俺を見てスノウが心配そうに話しかけてくる。

「甘えのが嫌いなだけだ」

「まあモ力だしね。カルト的にはキリマンのーが良かったんでしょ」  
「まあな」

まあせつかくなので一口啜る。確かに甘ったるいが、使った水が良いいせいか何故か美味かった。いい水がいいコーヒー作るって本当なんだな。そんな矢先に基地から通信が入った。

「ああ!？」

『中継基地です。南ゲート前の平原にエネミーの反応があります。気を付けてください』

「カルト、あれ」

通信が入ってすぐに、セレナが敵の存在に気づいた。

「能力は」

『わかりません、アンノウンです』

「そうか、まあアンノウンなのはいつもの事か。中継基地、カルト・ヴェステンバーグ、スノウ・ルウベルカ、セレナ・チェリカールで迎撃する。．．．出ンぞ」

「わかった」

「わかりました」

二人にそれを伝えて、飛翔する。指定の座標軸に來ると芋虫っぽいやつが俺たちがいた場所に群れてきているのが見てとれた。

「うわなにアレキモツ!!」

「．．．なにか吐き気がしますね」

「全くだな」

つい正直な感想を言っちゃった。まあいい。

「燃やし尽くしてやるぜ．．．ッ!!」

俺は炎を纏わせたロングノスを抜いた。

I v i e u k a z u k i

「カルトラがアンノウンと接触したみたいだな」

「ええ!？」

京谷さんが口にした言葉になのはが驚愕の声をあげる。

「ふむ．．．しかしそれでもすごい勢いでぶっ倒しておるの」

紫苑さんが言ったとおり、カルトさん達は激しく暴れまわり、敵を打ち倒していた。だけど不安なことはある。

「後処理どうするんだ・・・」  
「・・・それは気にしない約束じゃ」

ガイアの生態系の維持に一抹の不安を覚えながら、ユーノラス基地に帰還した。

- view kurono -

どうやら無事に任務に当たっているようだ。優秀な人間が事に当たると非常に助かるな。

だが、これで余計に事が分からなくなる。それは何故か。

「行動が予測出来なさすぎる・・・」  
「そうだね・・・」

僕のばやきにフェイトが同意する。執務官の職に就いてるだけあって、そのへんはよく分かるらしい。

「作戦指揮官の辛いところだね」

フェイトが同情の言葉を上げる。指揮官はあらゆる方面から物事を見なければならぬ。それに対応できる部隊がいるのか、どれくらいで手配できるか、など事務処理がいつも付きまとう。特に、各部隊には保持制限があるからおいそれと出撃手配ができないのも歯痒い。まあ・・・ナイトオブラウンズは局長特轄だから例外で破格の

戦闘能力を持ったやつが集まっているが。

「とにかく、手当たり次第に探すしかないのが現状だな」

「そうだね……。そろそろみんなが帰ってくる頃じゃないかな」

「ん、そうだな。全員基地に着いて転送処理に入ったところか」

僕はモニターを見て呟く。どうやら遭遇した敵と派手にドンパチやっていたらしくカルトは不満そうに、一騎はやれやれといった感じな顔を浮かべていた。すると、無限書庫から通信が入った。ユーノか。僕は直ぐ様繋ぐ。

「ユーノか」

『うん。検索した結果、”みおん”に該当するデータは30件ほど』

「内容は」

『内容ねえ……。全然大したことないよ。なんせ40年も前に管理局に居た魔導師、しもさかみおん下坂魅音って人の一部戦闘ビデオと彼女の書見と  
か程度』

「下坂魅音……?」

僕はその言葉に覚えはなかった。40年前となれば”三提督”より前の時代だ、俺の知り合いでは誰一人知らないかもしれない。

『まあ誰も知らないよねえ、知ってるならあの人と同じ時代の人くらいだと思うよ』

「どういう意味だ」

『今の管理局の人間のほとんどの人間は知る由がない。要するに……彼女の事はタブーでもあるんだ』

「はあ?」

『何故かと言うと……。書見で見たんだけど、下坂魅音が管理局に居た期間はたったの二年弱。居なくなっただけ、新暦0029年の

12/4になつてる』

「それは、”エクスワールド事件”じゃないか？」

『そうだね。それを境に彼女のデータはまったくないよ』

ユーノがそう言つて、僕は考え込んだ。余計に接点がつかなくなつてきた。みおん、下坂魅音としても、今回の事件に何ら結び付きがない。やはりボツなのか？

僕は頭をフル回転させようとしたところでそれは霧散した。みんなが帰ってきたからだ。

- view kazuki -

「「「ただいま戻りました」」」

全員が声を揃えて、帰還を伝える。そこにはクロノさんとフェイト、そしてモニターにはユーノがいた。

『あ、なのはお疲れさま』

「ユーノくんもお疲れさま」

なのははマイペースにユーノと会話する。クロノさんがバツを悪そうにしている辺り、なにか取り込み中だったのかもしれない。

『それじゃあ引き続き検索や情報収集に専念するよ』

「わかった、任せたぞ」

ユ一ノが通信を切る。そして振り向いたクロノさんは労いの言葉をかけた。

「お疲れさま、みんな」

「ああ、ただいま」

「うーっす」

「クロノ提督もお疲れさま」

など、各々が返事を返す。そのまま京谷さんは続けた。

「そっちはどうだ」

「それはこれから話す。だから紫苑も残っていてくれ。他のみんなは母さんらが会食の準備をしているからそっちに向かっているから」

「やたあー!!」

「ご飯ーっ」

飯と聞いて、セレナと残っていた優希が喜色の声をあげる。同じく残っていたはやてはふむと考え込む仕草をする。

「せやから、シグナムらが今朝から居らへんかったんやなあ・・・」

「あー・・・じゃあうちの連中もか」

「京谷くんとこも？」

「なにせよこの人数だしな・・・人手が要るんだろっな」

「せやなあ・・・うちらが見てるメンバー殆ど大飯食らいやから・・・」

「」

二人してふう、とため息をついていた。なんなんだ？

「まあいい・・・。みんな一騎と行ってこい」

「「「はぁーい」「」」

「つて待てや」

「なんだよ一騎」

「なんで俺がお守りなんだ、カルトが居るだろ」

「俺アガキのお守りなんざ出来ないんでな」

「．．．だよ」

出来ないじゃなくて、ただダルいだけなんじゃないだろうか。

「そんなこと言ったらスノウとの子供が出来たらどうするのよ」

「う、おおいテメエ喧嘩売ってんのかゴルァ!？」

セレナが止めを刺した。スノウはと言うと。

「わ．．．私がカルトの．．．／／／」

乙女モードが発動していた。なのらはあはは、と愛想笑いを浮かべるだけだ。

まあ、こういうのは取り分けラウンズ内では日常だったりする。俺としては迷惑省みないのだが、今では満更でもない。そうこうしているうちに終息したので、食堂に向かった。

- v i e w k y o y a -

やれやれ、ようやくみんな行きやがったか。しかし、あのカルトを宥めるとは優希も凄いな。

「．．．で、どうして俺と紫苑を残したんだ？」

「それは二人が一番冷静な判断が出来ると思ってたからな」

「儂はともかく、京谷がそんな器の広い男には見えぬのじゃが．．．」

「じゃあ二代目隊長にするなよ。」

「まあそうなんだが．．．」

「そこで認めるな、悲しくなる。」

「別に一騎も残してもよかつたんだが．．．実践経験、まだあいつは一年とないだろ」

「そうじゃな．．．まだ短期カリキュラムを終えて一年とおらんから、いくら落ち着いた童（わらし：子供の意）でもさすがに不安じやろつて」

紫苑はふむ、と首肯した。そう．．．まだ一騎は実践経験が拙い。というか、あいつが魔法に触れてまだ2年しかないのだ。俺が一騎と出会ったのは、なのはと保護任務をしていたときだ。たしか、魔物に囲まれていたのを助けたのが最初だったな。その直後、不意を取られたのをあいつが俺が出していた『エクスカリバー約束された勝利の剣』を奪って防いだ。

あれは嫉妬したな、その後その敵を一撃で潰したんだしな。それから一騎は唯一の肉親である妹を連れて管理局入りを決めたのだ。そして卒業後の進路にナイトオブブラウズを選び、今に至る．．．と。

「おい京谷、なにを呆けておる。行くぞ」

「ああ．．．すまない」

紫苑に呼ばれ、俺は二人に付いていった。

そして向かったのは何やら薄暗い記録室。

「ここは？」

「見ての通り、記録室だ。これを見てくれ」

そう言つて、クロノはパネルを操作してひとつの映像を投影した。そこには、フェイトに似たバリアジャケットを着たなのは似の少女が、恐ろしい反応速度で演習用CPUを叩き潰している映像が写し出された。

「・・・京谷が女だったらこういつ感じだったのじゃろつな」

紫苑がポツリと呟く。

「彼女は、下坂魅音。管理局で二年間働いていた空戦EXの魔導師だ」

「EX？」

「てつきり俺だけだと思つていたけどな。だけどリンディさんだけは俺の魔力量見てそこまで驚いてなかったしいてもおかしくないなとは思つていた。」

「ああ、当時の管理局の魔力ランクじゃ彼女の魔力量を定義できなかったんだ。それくらい、異常な量の魔力を持っていたらしい」

「まさに京谷じゃな」

「だけど、そんなくらいすごいやつならもつと資料残つていてもいい

んじゃないか？」

俺は核心を突いた質問をする。しかしクロノは横に首を振った。

「残念だが、欠片も残っていない。よくよく調べたらこの資料も近いうちに廃棄指定になっていたしな」

「それはよく意味が分かるの。それほど魔導師なら、後世に末長く名を残すべきじゃろ」

「それはそうなんだが・・・どんなデータベース探しても、ほとんど残っていないんだ。理由がわかれば苦労しないな」

クロノは嘆息するように言った。俺もしばらく考え込む。なぜ、そのような魔導師がいて、ここまで記録が少ないのか。あたかも彼女がいたことを隠そうとしているようにしか見えない。

「まあ・・・現状では判断材料に乏しすぎるじゃろ。今はこの件は保留じゃな」

「ああ・・・では、二人も食堂へ向かってくれ」

「ああ、クロノは」

「僕はもう少し書見していくよ」

「りょーかい」

そして、俺と紫苑は食堂へ向かった。

ところ変わって食堂。俺達が食堂に着くと、そこではシャーリーさんやリンディさんに加え、アリスやシオン、フィオネらもいた。

「おかえりー」

「お疲れさま」

「あれ、京谷は？」

「まだ記録室じゃないかな」

「そっか・・・」

「ってなんやねんこの料理の多さ」

はやてが料理の多さに突っ込みをいれる。それにシオンと星川姉妹がフオローを入れた。

「私たちが買い出しに行っていたのですよ」

「だよー」

「ですよ」

あー、だから用事が・・・とか言っていたのか。多分きららとさららもシオンの手伝いで来たのだろうな。

「あ、この辺は京谷くんが」

「京谷さんも？」

「せっかくみんな集まるなら、って急遽手配したみたいよ」

妙なところで気が回るやつだな、とか思いながら食卓を見回す。本当に彩りみどりで美味しそうだ。

「さ、みんな。たと召し上がれ」

「「「「「「「「「「「「「「「」

リンディさんの声で、それぞれが食べたいものところに行き、皿に取って食べる。俺は無邪気組のみんなの動向を見ながら一息ついた。そこになのはらエース三人娘が近寄ってくる。

「はい、一騎くん」

「ああ、ありがとう」

なのはから、ジュースが入ったグラスを受け取り4人で乾杯。ちよつとだけ嬉しかった。

「なに食べよつか、リイン？」

「私はあれがいいですー」

「いきなり七面鳥!？」

「はやく食べないとアルフに食べられるです．．．」

「あはは．．．」

「一騎くんはなに食べんねや? ついでくるで?」

「ん、そうだな．．．」

せつかくなので、立ったままでも食べられるものをお願いしたら、さすが関西娘。焼き鳥と串カツオンリーだった。

「主はやて、こちらでしたか」

「あ、シグナム。それに他のみんなも」

「ん、新入りか? はやて」

「あ、こっちのイケメン「イケメン言うな」は一騎くんや」

スルーしやがった．．．!

「ふむ、ではあちらの子供たちは?」

「あっちのちっこいのがきららとさくら。赤い髪止めのがきららな。」

で、その後ろにいるのが俺の妹で優希。そいでカルトさんらというのが希来」

「ほう．．．ラウンズもいつの間にか若年戦力を入れていたのか。しかし、京谷もだがこの年齢で特務隊とは恐ろしい子供だな？」

「．．．まあ」

シグナムのペースに簡単に吞まれそうになる俺。さすが、管理局の姉御と呼ばれることはある。

「して．．．剣が得物か」

「あ、はい」

「よし、後で模擬戦だ」

「またシグナムやってらあ」

「む、なんだヴィータ。別に構わんだらう、猛者と戦いたいと思うのは戦士としての本能だぞ？」

「あはは．．．シグナムは戦うの好きだしね」

フェイトはシグナムの強引ぶりにあははと笑う。人の事言えないだろ、とヴィータが視線を送っていた。それに気づいたフェイトは反論する。

「な、なによヴィータ、その”お前も人のこと言えないだろこのバトルマニアが”みたいな視線は」

「当たり前だろ、いつもうちのシグナムと模擬戦してるくせに」

「あう．．．」

「あはは、フェイトちゃんも好きだもんね」

「なのはまで．．．」

フェイトはしゅん、と頂垂れる。俺はその様子を微笑ましく眺めていると、制服の袖を引っ張る者がいた。優希である。

「お兄ちゃん」

「ん、どうした」

「せっかくだし、アレ見せない？」

「ああ．．．アレか」

そうやって、俺は情報端末を操作する。

すると、俺の情報端末に3人の少女が写し出される。

「あれ、この子らは」

「『アーク、エリカ、ステラ13歳誕生日』祝い」

「ああ、マテリアル三人娘だよ」

「たしか京谷らが保護したんだっけ」

そう．．．彼女らはなのはらが9歳の時に対峙した闇統べる王、星光の殲滅者、雷刃の襲撃者だ。二年前たまたま鉢合わせになったところを俺達が保護し、現在に至る。

「まあ闇の書プログラムゆつても、素性は女の子やしな。しかしうちらによつ似とるなあ」

はやてはまじまじと、三人の写真を見比べる。シグナムはふう、と息を吐いて

「まあみんな正反対だがな、特にテストロッサ」

「ええ．．．っ！」

「あー．．．それは分かるかも」

「なのはも!？」

「アホの子だもんね．．．」

「あはは．．．」

「あれ、一騎引つ張りだこだねこれ」

そう言つて、優希は俺の端末を操作して俺がエリカらという写真を表示した。

「まっただくだな・・・この色男め」

「ちげえよっ／＼」

「あはは、一騎くん顔赤いねんで？」

「くう・・・ってフェイトはなんで難しそうな顔してるんだ？」

「ふえ！？な、なんでもないよっ／＼／＼」

首をブンブン振つて否定するフェイト。なんなんだ？

「フェイトちゃん照れちゃって可愛い」

「違いますよシャマルっ／＼／＼」

とまあフェイトが弄られてる間に、俺は串カツと焼き鳥を平らげたので、おかわりをしに食台に向かう。おかわりを適当に注いでいると、隣にはシオンさんがいた。

「どうしたんですか、シオンさん？」

「いえ・・・」

シオンさんはふるふると首を振つた。それに併せて、黒リボンで縛つた長い尾の髪が揺れる。

シオンさんとは年が五つも違つたためか、お姉さんのような風がある。もちろんシグナムのような姉御気質ではなく、優しく物静かなタイプだ。昔から身寄りのなかつた俺としては、少し憧れでもある。

「皆さんとは割りと馴染めてますね」

「まあ、あれくらいいごいご来られる方が嬉しいしな」

「そうですね・・・」

そう言つて、わずかに微笑むシオンさん。いつ見ても落ち着く笑顔だな、と思う。

「あ、いただきますね？」

と言つて、シオンさんは俺の串カツを取つた。代わりに俺はシオンさんがついでいたおにぎりを貰つて食べた。

そんなこんなで時間が過ぎ、あらかた平らげたところではやてが再び声をかけてきた。

「せや、一騎君は三日後からの盆休みは暇してるん？」

「ん？ああ、暇だが」

「せやったら、うちらと旅行行かへん？」

「旅行？」

「せや、地球の日本、大分に旅行や」

なんでそこなんだよ。俺たちならミコノスでも十分行けるだろうに。

「誰が行くんのだ？」

「せやな、今のところはセレナちゃん、なのはちゃん、フェイトちゃん、命ちゃん、優希ちゃんやね」

「女の子ばつかじゃないか」

「せやから、一騎くんと希来くんに来てほしいなと」

「京谷さんやカルトさんでもいいだろ」

「カルトさんはなんか怖いし、京谷くんに相談したら」一騎連れて

いきなよ、いやむしろ命令で行かせる” ゆつて」

「前者は納得できるが後者はふざけんなカスがって感じだな」

「う、おおおい、どういう意味じゃゴラァ!？」

「ひゃあ!？」

カルトさんの怒声に方をすくませ、背中に隠れるはやて。何故かは解らないが、恐怖対象のようだ。

「まあまあカルトさん」

「つててめえも納得してんじゃねえ!!」

「事実ですし・・・」

「認めんな!!」

「まあまあ、そのへんにしとけよカルト」

そこに京谷さんが割って入る。カルトはバツが悪そうに舌打ちをし、そこを離れる。

「で、誰がふざけんなカスがって? (ニコツ)」

「お前以外に誰が居んねん、なにが悲しくて子供たちのお守りを」

「やらなかつたら管理局全体にお前のロリコン癖を流すからな」 分かった任せておけ」

うむ、天涯孤独より四日間みんなの面倒見る方が何倍も楽しだな。

いくら俺でも物事の善し悪しは分かるつもりだ。

「それにみんなの面倒見てる方が、お前は顔が活き活きしてるしな」

「そうかあ？」

京谷さんの言葉に俺は面を食らったような返事をした。まあ、自分が知らない部分を人が知っている時もあるが。

「そうですね。一騎は面倒見がよいですから適任かと」

「そうじゃの。京谷でも構わんじやろうが行動の自由という点では一騎に軍配があるじやろうて」

紫苑さんとスノウも京谷さんの決定に同意する。それを聞いて、京谷さんは俺の方に手を置き、満面の笑顔で

「ま、ハーレムを楽しんでこいや（ニコッ）」

カルトさんがたまに京谷殺すとかほざく理由が何となくわかる気がした。俺は頭を掻きながら了承し、シグナムに目配せする。それを感じ取ったシグナムはうむ、と頷いて近づいてくる。

「では京谷、一騎と模擬戦するから借りていくぞ」

「ああ、ボッコボコにしてやってくれ」

「ふむ、やれたら尽力しよう」

「あ、優希ちゃん私とやるんだよね!？」

「ふえ!？」

「任務前に言ってたでしょ?さ、行こ!」

「うえ、あ、ちょ、ふにゃああああ!？」

模擬戦の約束を思い出したなのは優希を引きずって、訓練室に向かった。

「じゃあ、行きますか」

「うむ」

そうして、なのはvs優希、シグナムvs俺の模擬戦が行われることとなった。



**R e w r i t e s : 魔王VS妹 俺VS烈火の騎士(前書き)**

京谷「マジで閲覧とかあるのか？」

一騎「さあ？」

命「作者は趣味で書いてるしいいんじゃない？でもせっかくなら読んでほしいよね」

京谷「まあな」

一騎「では始まるぞ」

## R e w r i t e 3 : 魔王VS妹 俺VS烈火の騎士

「じゃあルールを説明するね」

審判役としてついでにきたフィオネが今回の模擬戦のルールを説明する。今回は公式のダメージカウンターを携行しての模擬戦で武器は非殺傷設定、貫通その他付加効果は非発動、ダメージカウンターは3000で行われることとなった。

ダメージカウンターは受けた衝撃の程度で数値が減っていき、0になればブザーがなる優れものである。また、こちらの防御や切り払いも検知してダメージ調整が行われるので安心して受け止めることができる。

「じゃあ私と優希ちゃんからだね」

「うう．．．」

初めて対戦するタイプに楽しそうなのはに対し、いらんとばかりを食らって鬱気味の優希。テンションの差は歴然である。

「ずいぶんテンションが低いな、お前の妹は」

「なんか恐怖対象みたいだ」

なのはと優希の模擬戦が終わるまで、外で見守ることを決め込んだ俺とシグナムは二人してコーヒーを啜っていた。

「一騎があいつらならどう戦う？」

「え？」

「一騎が優希、なのはの立場に立って戦うならどんな対策を取るか、だ」

俺がなのはなら、優希をどう攻めるか。優希はデバイスこそ剣だが、どちらかといえば魔法でお膳立てして、斬りつけるタイプだ。ならば。

「そうだな、まずはフェイスのチャージタイムを取らせないようにする」

「フェイス？」

「優希のデバイス単体の攻撃力を強化する魔法でオリジナルなんだ。あれを使われたら、いくら魔法を防いでも間合いを詰められて、十八番の”フリンジングラッシュ”かまされて撃墜とされるな」

フリンジングラッシュは優希が現時点で使える最強の技だ。四撃一体で、右薙ぎ、左薙ぎまでは同じでそこからは自転して足撃ちや踏み込み撃ち等三撃目はバリエーションに富む。四撃目は上からの切り下ろしか回転して突撃、または2本の剣で振り抜く形となる。形はどうあれ、3と4の破壊力は本当に優希かというくらい凄い。試し撃ちの時受けたが、凶らずも吹っ飛ばされた記憶がある。

「ふむ、では彼女は数で攻めるタイプなのだな」

「ああ、しかもタチの悪いことにひとつふたつ潰しても、すぐに修整してくる。なのはが勝つにはいつ優希の計略に気づくか、だな」

「じゃあ優希の立場なら？」

「優希なら、でかいのを撃たせないことだな。なのははシューターがあるから、それをいかに掻い潜って間合いを詰めるか。そしてバスターとブレイカーを撃たせなければ負けはないと思う」

「だが、曲がりなりにもなのはは戦技教導隊の人間だ。ただ対策を打つだけでは優希は勝てんだろうな」

「ああ、勝負の分かれ目はどちらの数撃ちが先に鈍くなるか、だな」

「お互い頭は良いから、単純な魔力比べには・・・お、始まるぞ」

シグナムがフィオネのゴーサインに気付き、俺は訓練場に目を向けた。

I v i e w   n a n o h a i

うわあ、初めて対戦するタイプだからときどきだなあ。

優希ちゃんのデバイスはあの2本の剣みたい。だけど、私と同じミッドチルタ式なんだよね。ということは魔法は使えるけど、どちらかといえば詰めるタイプなんだね。

「じゃあ、いきますよ？スタンバイレディ・・・」

フィオネちゃんの掛け声を聞いて、私はレイジングハートを構える。

「ゴーツ！」

ゴーサインの刹那、優希ちゃんは直ぐに詠唱を始めた。私はアクセルシューターを展開して全弾叩き込む。だけど、さすが優希ちゃん。詠唱破棄して切り払った。

「やああああ！！！」

優希ちゃんはその反動を利用して斬りかかってくる。私はそれをレイジングハートで受けた。

ギインツ

そのまま、鏑迫り合いの状態に入る。力任せに押し合う時間が少し続く。

「ッ！！」

これまた同時に振り払い、距離を取る。そこから私はデイバインバスターの発射体勢に入った。見れば、優希ちゃんもなにか唱えている。

「デイバイン．．．バスター！！」

「クロス．．．スレイヴツ！！」

お互いの砲撃と斬撃は中間距離で交錯し相殺、大きな爆発が起こった。だけど、その上から大きく優希ちゃんが飛び上がった。

「ACSドライバー、ドライブ！！」

それを見た私は、私の近接攻撃モードであるACSドライバーを起動させて迎撃した。その直後、優希ちゃんの一刀と私のバスターがぶつかる。

「．．．ッ」

優希ちゃんは苦虫を潰したような顔をする。どうやら、これは完璧に不意を取ったと思ったみたい。だけど甘いね。

「私は．．．簡単には落ちないよ？」

私はつい、そう微笑みかけた。

I v i e w   y u k i i

強い。

私が一番最初に思った感想。フィオネさんの始めの合図の瞬間に、あれだけの破壊力を持った攻撃を素早く撃ち込まれたときは瞬殺されるかと思ったくらいだ。それをなんとか切り払って防いだ後も、ほとんどの行動で私は遅れをとっていた。

そして今も、不意を取ったと思った一撃を難なく止められている。

「私は・・・簡単には落ちないよ？」

そう言われたとき、私は言うだけの力はあると思った。それに、ランクも年も上だしね。

「・・・でも、負けられない!!」

私は距離を大きく取る。そして私のサンライズとルナティックの柄を合わせ、キーワードを唱えた。

「クロスジャベリンモード、ドライブ!!」

クロスジャベリンモードは、私の2本一対であるこのデバイスを1

つにして扱いやすく、かつ攻撃力の増加を図るモードだ。さすがになのはさんもビックリしたんだろう、少し驚愕の表情を浮かべた。

やるなら、今だ。

それを悟った私は一気に間合いを詰め、ルナティック側で突きを繰り出す。それをなのはさんは紙一重でかわし、さらにそのままアクセルシューターを私目掛けて撃ってきた。さっきはかなりヤバかったけど、今は大丈夫。そのまま反転して、剣をバトンのように回して防いだ。

「!?!」

「まだまだあ!」

その隙を見逃さない。刹那にクロスジャベリンモードを解き、横薙ぎに一閃。切っ先なのはさんのバリアジャケットをわずかに裂いた。さらに、

「アクアジェット!!」

ルナティックを自分の足元に撃ちつけ、水撃を発生させた。しかも、これは私の技の中で一番弾速が速い技だ。

『ProtectionEX』

「っ!」

やっぱり簡単にはいかないか……。プロテクションEXで防がれてしまった。

「優希ちゃん……。凄いね。私、もっと全力で行けるよ……。!」

「・・・お好きに！」

と思った矢先、なのはさんのただならぬ魔力の上昇が始まる。そしてなのはさんが手を翳すと、アクセルシューターよりも威力の高そうな魔力弾が形成された。

（クラスター！！）

本能的に身の危険を感じた私は防御魔法”ウイングブレイカー”を展開し、空域を素早く離れた。数瞬遅れて、私が居た辺りで爆発が起こる。

（・・・防ぎきれないの！？）

なのはさんはさらにフライヤーフィンを全開にしたままアクセルシューターを撃ってくる。ここまでされると私は防ぎきれない。瞬間に蜂の巣にされ、私はバランスを崩した。だが、もっとえげつないことをしてくる。あるうことが、そのままダイバインバスターを向けてきた。

（嘘！？）

直ぐに体勢を建て直して、なのはさんにダイバインバスターを撃たせまいと迫る。

「ダイバイン・・・バスター！！」

遅かった。射線軸にいた訳じゃないが空戦Sの砲撃だ、かすっただけでも私は大きなダメージを受けた。カウンターを確認すると、既に500になっている。どうやら次の攻撃で雌雄を決しそうだ。

「最後は、お互いの全力全開で決めましょ」

なのはさんは、そう私に言ってきた。．．．挑むところよ、こちらも自身の必殺技を繰り出そう。私は剣を構え直した。

- view nanoha -

うん、反応速度もなかなかだし私の攻撃も読めてる。けど体が頭についていてない感じ．．．かな。時々反応が鈍い。そしてさっきの攻撃でカウンターも大分減っただろうと思う。お互いの全力全開で決めましょって言ったけど、ぶっちゃけあの子の最高の攻撃が見ただけなんだけどね。

『starlight breaker』

そして全力全開の必殺砲撃、スターライトブレイカーのスタンバイに入る。念のために発射直前に効果が切れるようにプロテクションを張っておいた。

『10．．．9．．．8．．．』

カウントダウンに入る。しかし、優希ちゃんは動く気配がない。何か策があるのかな。

『7．．．6．．．5．．．』

が、まだ動かない。

『4...3...』

その時だ。突然、優希ちゃんの姿形がぶれる。そして、気づけば目の前に迫っていた。

(チャージ!!)

優希ちゃんの右薙ぎの一撃が真つ正面からぶつかると。もちろん、プロテクションを張っているため届くことはない。が、優希ちゃんは構わず左薙ぎの一撃を叩き込んできた。

(さらに連撃...!)

じゃああれはチャージタイムだったのか! やられた...! だけど... やらせない!!

- view yukki -

(防がれた!? だけどもめげるもんか!!)

私は構わず三撃目に入った。私の攻撃力が極端に大きくなるその一瞬は、なのはさんのバリアを完全に打ち砕いた。

「な．．．!!」

なのはさんが驚愕の表情を浮かべる。しかしそれも一瞬だった。目の端でそれを捉えたとき、ブレイカーの発射を予感させた。

「スターライトオ．．．ブレイカーッ!!!」

「ぶっ．．．とべえッ!!!」

私のフィニッシュとブレイカーが真っ正面からぶつかった。暫しの均衡状態が続く。しかし、それも程なく終わった。私の攻撃の効力がなくなったのだ。スターライトブレイカーをモロに受けた私に為す術はなく、結局試合なのはさんの圧勝で幕を閉じた。

- v i e w   k a z u k i -

「あうー．．．お兄ちゃん負けたあ．．．」

「あはは．．．よしよし」

いくら実力が掛け離れていても悔しかったのだろう、シュンとなった優希の頭を俺は撫でる。

「で．．．どうだ？うちの妹は」

「うん、初めて戦うタイプだったとは言え攻撃やトラップ、誘導が素直だから看破しやすかった。けど、AAランクらしかぬ突破力と瞬発力は光るものがあるね。私なら．．．そうだなあ、もう少し射

撃能力とスタミナ、そいで瞬発力のさらなる強化に重点置いて．．．  
それに加えて最後の技に近く、かつ使い勝手がいい技の会得を目指  
させるかな」

さすが戦技教導官。分析や傾向だけでなく、これからの成長指針ま  
で打ち出した。ふむ、じゃあ優希の指導をなのはにさせてみようか  
な。優希はあまり人と仲良くしようとしないうつだからいい機会だ。

「なあ、優希の指導を任せていいか？」

「優希ちゃんのこと？」

「ああ、優希は今でこそアレだがあまり人と仲良くしようとしな  
やつだから．．．教導もかねて仲良くしてほしくてな」

「．．．なあに言ってるのよ一騎くん？私は元よりそのつもりなん  
だからね」

「そっか．．．じゃあよろしくな」

「うん よろしくね、優希ちゃん」

「．．．はいっ」

良かった、なんとか打ち解けられそうだ。そう思っていたときに、  
肩に手を置くものがいた。シグナムである。

「では、殺し合い（試合）を始めようか」

「ああ、なんか当て字が違う気がしたが突っ込まないでござい」

「が、頑張つてねっ（ガクガクブルブル）」

いやいや、なんで微妙に震えてるんですか。まあこの直後、俺はそ  
の当て字があながち間違いないことを身を持って知ることになった。

「どっしたんだ、はやて。そんなご機嫌に鼻唄唄って」

俺達はあの後食事の跡形付けがてら、アースラの食堂でのんびりしていた。

俺はというと、はやて、アリスと食器洗いをしている。なにが悲しくて男が食器洗いなんだか。紫苑曰く”意外性を突いた起用”らしい。

「そりゃあみんな旅行は楽しいやんか？」

いや絶対嘘だ。一騎と話すのを心待ちにした目だ。思えば興味を引いたものにはとことん詰め寄るからなあ、こいつは。でなきゃあの日に俺に興味を抱くことはなかっただろうし、ある意味こいつが興味を持ったから今の俺がいる。だから一番感謝しなきゃならないのはこいつかも知れない。

「楽しそうだね、はやて」

「せや まあ同年代のみんなで行ければ一番ええんやろうけど、こればっかりはなあ・・・」

「大丈夫だよ、はやて。はやてが帰ってきたら今度は残ったメンバーが休みだからその時は盛大に自慢しながら行ってくて」

「なんや今日は意地悪やな？」

それはお前が一騎にホの字な感じに見えるからだろ。アリスはツンデレでヤキモチ焼きだからな。

「．．．なんか失礼なこと考えた？京谷」  
「気のせいだろ」

「ってなんでこうも勘がいいやつばかりなんだ．．．たく。とにかく手早に洗い物を片付けていく。」

「．．．．．」

「って今度はなんだよ」

「いや．．．京谷くんほんまなんでも出来るなあって．．．」

「まったく男のクセに腹立つよね。一騎も料理作るのバカみたいに上手いし。こないだだってフランス料理フルコース作ったんだよ？」

「マジで！？俺それ初耳だぞ！？」

「うん、京谷とカルト、セレナが任務で出てたときに一騎が”あいつがない内に美味しいもん食わせてやる”って」

「．．．あいつ俺がいない間に．．．。なんか最近俺に対する態度に疑問を感じないわけではない。」

「まあまあ、喧嘩するだけ仲ええゆうし．．．」

「いっつもなにかしらぶつかってるような気もするけどね。まあ一騎は作るだけ作ってまた厨房に籠ってただけ」

「ってどんだけバカにする気なんだ俺を」

「後で聞いたら”フランス料理大嫌いだからな”って言ってた」

「食えもしないのに料理法身に付けるなよ。」

「でも食わんのに作れるんやね。なんでやる？」

「それは気になるな」

「アリスが出し惜しみする前に俺も知りたいと告げておく。アリスは

ツンデレ属性があるだけあって気まぐれだから、みんな知りたいたい  
言う雰囲気を作っておかないと絶対に聞き出せない。

「って京谷がなんで気になるのよ」

「そりゃあ気になるだろ!？」

「いやいや．．．一番近くにいたアンタが気づかないってどうなのよ」

ますます意味が分からない。俺が一番知っている？

「ほら、一騎の研修期間。みんなになかなか馴染めなくて書庫読み  
荒らしてたでしょ」

「あぁー．．．あつたなあそんな時期」

一騎と優希がラウンズに入ってから研修期間、ずっと二人はみんなに馴染めなかった。研修期間の終わりかけによく馴染め出したのだが、それは割愛する。ともあれ、待機時間の間は2人して書庫に籠っていたのだ。たまに俺が様子見に行つて話しかけたりもしたが全部無視された。腹立たしくなつて、セレナ、紫苑と一緒に一騎が読んでる後ろに机を積んで派手にひっくり返すイタズラを敢行したが、やはり無視だった。今思えばその集中力が一騎の強さを物語っているなと今更ながら実感している。事実、俺が研修期間中に仕込んだ”斬魔術”を完璧にマスターし、更に自分のオリジナル剣術まで編み出した。特にあいつの”龍の咆哮”に似た技．．．あれの破壊力は最早．．．

「ってボヤツとしないでよ京谷！」

アリスに蹴りを入れられ我に返る。いかんいかん、つい考え込んでしまった。まあなんだかんだで皿洗いは終わってる。

って終わったなら蹴るなよ。

俺は手を拭きながらエプロンを外す。その後をはやてがにやにやし  
ながら付いてきた。

「どうしたんだよ、はやて」

「さっき一騎くんのこと考えてたやろ」

「考えてねえ」

「私は分かるでえ？一騎くんの事話してるときどっか嬉しそうやも  
ん」

「やめてくれ、気持ち悪い」

俺は手早く片付けると自分の執務室に向かうことにした。どちみち  
仕事溜まつてることには変わらない。とと・・・

「そついやはやて、一騎に荷造りの事言ったのか？」

「ううん、言っていないよ。今から言いに行くところ」

「そついや模擬戦してるんだよな。ちよっと様子見るか？」

「せやね」

近くの休憩室に入り、端末を操作して一騎らがいる訓練室のモニタ  
ーを開いた。そこに映し出されたのは、とても子供には見せられな  
いものだった。

- v i e w k a z u k i -

ギインッ

「．．．！！！！」

「くっ．．．！！！！」

これで何度目の鏝迫り合いだろうか。というかどれだけの時間が経ったのかすら分からない。分かるのはお互いが非常に消耗していることだ。

「はあ．．．はあ．．．なかなかやるな．．．一騎．．．」

「シグナムこそ．．．」

そして再び烈火を纏わせたレヴァンティンで斬りかかってくる。すでに俺は握っていた刀を黒龍に切り替えている。それを受け、そのまま切り抜ける。

「甘い！！」

すかさず返し刃。すぐさま体を反転させて刀を縦にして受けた。

「さすがだな、一騎。だがそこまで無茶な行動は無駄に体力を使うだけだぞ」

「分かってる．．．さ！！」

刹那の隙を突いて一気に離れる。そして刀に魔力を込めた。

「閃魔．．．飛光撃ッ！！」

稲妻に似た、魔力の光刃がシグナムに直撃し爆発した。しかしその煙の中からシグナムが現れ、剣を向けた。

「吼える蛇 丸!!」  
「絶対ネタだよな!?!」

こいつはシユランゲモード・・・レヴァンティンが分離し、そのまま降り下ろしてきた。

「くっ」

さすがに初めて戦うタイプだ、軌道を読めなければ意味がない。

「そおら餌だ!!」

「だからネタだよな!?!」

そのまま右薙ぎに振り払ってくる。攻撃する度に某パイナップル頭の赤髪死神の真似してるのは気のせいじゃないだろう。

「逃げているだけでは勝てんぞ!!」

そこで一旦戻し、再びレヴァンティンを伸ばしてくる。俺は右に体を反らしてかわし、そのまま突貫する。

「ちっ」

シグナムはすぐさまレヴァンティンを戻し、袈裟懸けの一撃を受け流し、さらにその力を利用して反撃に転じた。さすがに俺は避けられず、右脚を斬られる。もちろん非殺傷設定なので体に傷はつかない。

俺はそのまま後ろに下がり、間合いをとる。シグナムも少し間合いを取った。

「ふむ、そろそろ魔力の限界だな・・・」

シグナムが呟く。たしかにこちらもかなり少ないし、おそらく次がラストショットになるだろう。

「では、己が叩き込める最高の一撃を斬り結ばせようではないか」  
「・・・ああ」

俺はそう言って刀を構え、魔力を斬る力に変換し、そして収束させた。シグナムもカートリッジをひとつ炸裂させ、レヴァンティンに焰を纏わせる。

「破魔・・・」

「紫電・・・」

「竜王刃ッ！！」「一閃ッ！！」

2つの巨大な魔力が凝縮されたお互いの一閃が真っ正面から衝突する。

「ぐっ・・・！！！」

「はあああああ！！！」

俺は渾身の力でシグナムを払い飛ばそうとする。だが、シグナムは口の端をつり上げた。

「まだ青いな」

そう言うと竜王刃を同じ力で流し、そのまま俺は返し刃で弾き飛ばされてしまった。

「ぐあつ!?!」

訓練室の壁に思いきり叩きつけられる。すぐにリカバリーしようと竜王刃の二射目に入ろうとしたが、魔力が収束が出来なくなっていた。

「魔力エンプティだな。強引な切り返しや瞬間的な高速機動の使いすぎだ」

シグナムはそう言いながら、レヴァンティンの切っ先を俺に向けた。もちろん為す術がないので降参である。

「はは．．．まだまだ俺も甘いな」

「いやいや、最後の一刀は良かったぞ? まあ甘いところだらけだが」「厳しいな」

愛想笑いを浮かべながら、訓練室を出て優希となのはの元に向かう。

「戻ったぞー、ってなんでふたりしてがたがた震えてるのさ」

「だ．．．だってだって．．．」

「?」

「なんなのアレ!? お兄ちゃん達よく生きてられるね!?!」

「あ、ああー．．．」

シグナムが成程といったように声をあげる。どうやらあの戦闘が恐怖対象に映ったらしい。

「いやいや、優希たちもそれなりな戦闘をしていたぞ?」

「だからって普通に吹っ飛ばす戦闘ってどうなのよ!?!」

優希が涙目になって反論する。

「あっはっはっ、可愛いな優希は（なでなで）」

「シグナムさん撫でて誤魔化さないでくださいっ」

なのはあはは．．．と愛想笑いを浮かべながら、シグナムと優希のやりとりを見ていた。

「あ、ちょうど終わったみたいなんやね」

「あ、はやてちゃん。どうかしたの？」

「一騎くんに用が．．．って怪我凄いな!?!シグナムも!?!」

「すみません、つい模擬戦に熱が入って」

「そっかあ。なのはちゃんや優希ちゃん、一騎くんもお疲れさまや」

はやてはあっはっはっと笑いながら俺たちの健闘を称える。やはり社交的なんだなと俺は思った。

「それで主はやて。一騎に用事とは？」

「ああ、せやったな」

そういつてポケットのなかをぐそぐそ漁るはやて。そしてひときれの紙を俺に手渡してきた。見ると、洗面器具や下着三日分などと書かれている。

「これは？」

「今回の盆休み旅行に必要なブツやな」

「なるほど、これを俺と優希の用意すればいいのか？」

「自分のだけでええよ？さすがに女の子の荷造りするのは男の子がするのはどうやるか」

「確かになあ．．．」

「ねえ、はやてさん」

「ん？なんや優希ちゃん」

優希がはやてに質問を投げ掛ける。なんだろう？

「持参物にWiiがあるけど」

「それは旅館でスマブラのガチバトルするためや」

いやいやいやいや、なに著作権に関わるもの引っ張り出してるんだよ。

「ちなみに負けたやつ罰ゲームな」

「やつぱりやるのかよ」

「はやてちゃんらしいねえ・・・」

しかし罰ゲームか・・・。ちょっと期待するな、うん。

「まあどんな罰ゲームにするかはまだ秘密な」

「だね、お楽しみは最後にだよ」

「そうか・・・」

「さ、体も汚れていますし早めに帰りましょう」

「せやな」

「だね」

シグナムの一言でみんながいる食堂に歩を向けた。その後は幾分か雑談した後、各々の隊舎へ転送帰還しオフシフトとなった。

日が進み、ここは俺と希来の部屋。二人して明日から行く九州旅行

に持って行く荷物の確認をしていた。

「いやあ、明日から旅行だね。楽しみだなあ・・・」

「そりゃあなにも考えなくて良いならな」

「あはは・・・一騎は皆のまとめ役やらなきゃならないもんね」

「・・・まったく京谷さんのやつ・・・」

ぶつくさ言いながらも、荷物を纏めていく。

「そーいや、魔力エンプティ大丈夫なの？」

寝る前なので、大人モードになっているアルルが問いかける。大小変化自在ならそのまま居てくれたらいいのにとか思わないでもない。

「ああ・・・明日要らんことしなきゃ大丈夫だろ」

「だよねえ。ま、んなこと言ってたら面倒事に巻き込まれるんだけど」

「止めてくれ、ゾツとしない」

「あはは・・・」

そう、こいつが嫌な予見をする度にバツチり当ててきている。正直なところなにか大きいイベントがある前の日はとっとと眠らせた方が良いのだけだ。

「でも、楽しみだよな」

「・・・ああ、そりゃあ年が近いやつら・・・それも女の子と一緒に行く旅行だ。楽しみじゃないはずない」

そりゃあ曲がりなりに男の子なんだから、そっちの事も少しくらい

は期待してしまう。まあ、正直なところ期待するだけ無駄だと思っているため、今回の旅行はうんと羽を伸ばすために使おう。

「．．．よし、これで準備完了だな」

「お疲れさま」

「じゃあ寝る？二人とも」

「うん」

「ああ、万が一があるから早めに寝よう」

荷造りも終わったため、手早く寝る支度を整えて床についた。アルルは俺の隣で大人モードで寝ている。

だからやめなさいと。

ま．．．明日からの四日間が有意義になればいいなと思いつつ、意識を闇に沈めた。

Rewrites：魔王VS妹 俺VS烈火の騎士（後書き）

一騎「なかなかいい感じだな」

作者「ここから急転直下話が進みだすんだけど」

シオン「作者さん・・・ねたばれダメ」

作者「おっと、すまん。というか・・・頭悪いな私」

京谷「いまさらか」

作者「あとで覚えてるよ・・・さて、読んでくれた方には無上の感謝を」

一騎「ここまで読んでくれた人は次も読んでくだされば幸いです」

## 作者オリジナルキャラクター設定

京谷「いきなりかよ。まあいいけど」

作者「や、紹介はしないとだよね？」

一騎「だいたいインスピレーションでわかるだろ。いちいち話すこともないと思うがな？」

命「えー……」

作者「まあ。今のところ京谷の能力の異常さが際立ってますけど、そのところ主人公の一騎さんはどのように？」

一騎「これはキャラへのインタビューなのか？」

作者「ただの文字稼ぎ」

一騎「死ね」

命「わたしはそこは気にしないかな。だって敵に勝てばいい話だし」

シオン「そんな簡単で……ええんかい？（びしっ）」

作者「まあいいや。じゃあ一騎の設定からチエケラ！」

名前：桜井 一騎

身長：164

体重：58

魔力ランク：古代ベルカ式空戦S

デバイス：アルテマウェポンⅡ？（ドゥーエ）+???

武器は黒身の刀『黒龍』&白身の刀『白龍』

性格：冷静なように見えてけっこう熱血型。カッとなってもそれなりに理性的。

見た目：ガンダムWのヒロの目をそこそこ穏和にした感じ。趣味は自爆なんてことはない。

一騎「?????てなんだよ。つかいきなりS+ってのもたいがいチートじゃないか」

作者「シグナムに負けたくせに。というかテメーが一番ビジュアル決まらなかつたんだよ。ざけんなよ畜生が」

京谷「つか一人で2個のデバイス持てたか?・・・まあはやてがそっただが」

作者「ネタバレになるので言いません!!次ッ」

名前：月城 命

身長：155

体重：45

魔力ランク：近代ベルカ式陸戦AA+

デバイス：槍型アームドデバイス オベリスク

性格：明るくはつらつ。凶太い性格。

見た目：はやての髪型に長いテールを付け加えたような感じ。シングルテール。横髪ははやてより長い。

京谷「けっこつまんまだな」

作者「ちなみに原案時にはおとなしい女の子の設定だったんだけどね……。いったい何があったのか。次！」

名前：星川きさら

身長：130

体重：25

魔力ランク：古代ベルカ式陸戦A+

デバイス：グローブ型アームデバイス デュナミスケイル

性格：男勝りでモノをはっきりと言う。実は繊細？

名前：星川さらら

身長：130

体重：26

魔力ランク：ミッドチルタ式空戦A+

デバイス：弓型インテリジェントデバイス テーレウェイソニック  
ロン？

性格：物静かでおとなしい女の子。しかし切れると怖い。

作者「現時点では数少ない幼女姉妹。これからいろいろ楽しみます

な」

京谷「ロリコンか!!」

一騎「変態だな・・・」

シオン「そういえばなれ初めとかどうなんでしょう?」

作者「本編が方着いたらやりますよ。次」

名前：シオン・E・グラキエース

身長：168

体重：53

魔力ランク：ミッドチルタ式空戦S+

デバイス：杖型インテリジェントデバイス アイシクルエッジ

性格：物静かな大人の女性。メンバー中一番精神年齢が高い。

シオン「・・・なぜかしら。ものすごくバカにされた気分・・・」

京谷「うおっ!?!?なんかこのあたり寒くなってないか!?!」

「一騎」<sup>オーバードライブ</sup>暴走が始まってんぞ!？」

作者「落ち着けシオン!?!とりあえず連続で次!?!」

名前：羽田 希来

身長：159

体重：53

魔力ランク：近代ベルカ式空戦AA+

デバイス：剣型アームドデバイス アロンダイト

性格：心優しい性格。戦いや日常でもそれは変わらず。でも芯はしっかりしている。

名前：桜井 優希

身長：147

体重：40

魔力ランク：ベルカ寄りハイブリッド式空戦AAA

デバイス：双剣型アームドデバイス ルナティック&サンライズ

性格：すこしあまえたがりな性格。明るいほうだが弱気なところも。

京谷「こんなものか」

一騎「京谷以下お借りしたキャラについては割愛させていただきます。」「了承を」

優希「でもこれってそこそこはぶいているよね？」

作者「よく気づいたね。だけど、ネタばれになるから私は絶対言わないから！」

一騎「まあ当たり前だな」

シオン「・・・共演依頼とか来たら面白そう・・・」

作者「気がはやいな!？」

希来「あはは・・・じゃあ今日はこの辺で。更新、楽しみにしてくださいね」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6751z/>

---

魔法少女リリカルなのはRewrite

2011年12月23日01時53分発行